



みんなで考えよう。  
人が人らしく生きるために…

## 「養老町少年の主張」 最優秀賞作品

家族との時間  
高田中学校三年

服部 心

「えっ?」

頭が真っ白になった…。

何気ないいつも通りの毎日。幸せな明日に向かって時間が進んでいたあの瞬間にそれは突然起こった。祖父の「おい、大丈夫か!どうしたんや!」という声が家中に響き渡る。

と同時に、「ちよっと、心!」と私の名を呼ぶ声がした。私は大声で返事をし、声のする方へ走っていった。嫌な予感がした…。ぎゅっと胸が締め付けられていくのが確かに分かる。たどりに着いた瞬間、想像以上の光景が私の目の前に広がっていた。

祖母が嘔吐して汗を流しながら倒れている。時間が止まる…。体がすくむ…。「どうしてこんなことに?」「急に何で?」たくさんの思いが交錯し恐怖につぶされそうになりながら、私は祖母が救急車で運ばれていくのをただただ見ていた…。

後日、祖母は「くも膜下出血」と診断された。死亡する確率は五〇%、手術成功率は四十四%の脳の難病だ。にも関わらず祖母は助かった。うれしさと安堵感で私の心はいっぱいだった。コロナ禍で病院へのお見舞いが厳しく制限された中、「早く会いたい」という思いが何よりも強くなった。

そうしているうちに祖母は退院した。久しぶりに見るその姿。後遺症が残る車いすに乗って帰ってきた祖母の姿に言葉を失った。変わり果てていた。体はやせ細り、血色が悪くなっていた。まいった祖母になんと声をかけたら良いのか。「ばあば、おかえり…。これがあの時唯一かけることのできた祖母への言葉だった。くも膜下出血は、後遺症が残れば重度の失語症や運動麻痺を起す病気。祖母はこの困難と闘っていくことになる。体の中心から右半身が動かず、不自由な生活を送る毎日。自分の感情が思うように伝わらず、苦しそうな表情を浮かべる祖母に後悔する気持ちわがわが上がった。「ああ、あの時私がつまらぬ冷静に動いていたら…。」何か手伝

っていたら、後遺症は残らずにすんだのではないかと…。

祖母は病気になる前から泣くことが増えた。あんなに笑顔でたくさん叱ってくれて、おもしろい祖母の姿はもうどこにもなかった。

しばらくして、私は母の勧めで、介護についての講習会に参加した。そこで私は「介護をする人は、される人の心に寄り添うことが大切」だと学んだ。はっとした。私は昔の祖母の姿ばかりにとらわれ、今の祖母らしさやありのままの祖母の姿を受け入れることができていなかったのだ。それから私は、祖母との時間を今まで以上に増やし、折り紙を折ったり、左手で一緒にご飯を食べたりと、祖母と一緒にできることをしている。起きてしまった過去を変えることはできないが、未来を変えることはできる。限られた時間、ほんの一瞬の行動が未来の自分や家族にどう繋がり残って行くのか深く考えてほしい。

あれからもう一年がたつ。今祖母はリハビリにマッサ―ジと、新しい自分に向き合い、後遺症を乗り越えよ

うとしている。笑顔も増えた。今振り返ると、あの出来事があった良かったとは決して思えない。でも、あの出来事があったからこそ、家族と過ごす時間や関わりがかけがえのないものだと気付くことができた。家族という存在。当たり前のように当たり前じゃない。人生なんて何が起るか分からない。後悔はしたくない。だからこそ、みなさんに今一番伝えたいことがある。まずは、あなたの家族に目を向けて見てほしい。今まで気付けなかった、家族の温かさに触れることができずだ。家族の大切さは日常では気付きにくいかもしれない。だからこそ、目を向けよう。今は良さを見つけられなくても、いつか必ず見えるようになる。

「ばあば、今日は鶴折ろうな!!」

「いいで!紙もってきい!!」

祖母はリハビリにマッサ―ジと、新しい自分に向き合い、後遺症を乗り越えよ



服部さんの主張からいかかでしたか。私がこの主張を通して考えたことは、次の二点です。

まず一つ目は、「家族」についてです。服部さんが言うように、身近なことほど、私たちにはそれが当たり前のことのように感じられ、誰もがその大切さに気付きにくくなっているのかもしれない。

「家族の絆」も、まさにその一つなのだと思います。私たちの周りには、温かいつながりが確かにある。この主張は、そのことを私たちに力強く教えてくれます。

二つ目は、「寄り添う」との意味です。服部さんは、祖母との関わりから、その意味を次のように捉えています。

過去の姿にとらわれず、今のその人らしさやありのままの姿を受け入れること。寄り添おうとしているつもりが、実は自分自身が過去にとらわれていたという気付きは、今後の人との関わりの中で、私たち誰もが忘れてはいけぬ大切な視点であると感じます。

皆さまは、何を感ぜられましたか?